

原 著

企業従業員の「生きがい」意識の構造について

塹 江 清 志* 岡 和 夫**

THE STRUCTURE OF THE CONSCIOUSNESS OF
“IKIGAI” OF EMPLOYEES IN ENTERPRISES

Kiyoshi HORIE*, Kazuo OKA**

The purpose of the present study was to investigate the structure of the consciousness of “Ikigai” of employees in enterprises. The Ss were 1,822 employees in 6 enterprises. The strength of the consciousness of “Ikigai” in “job”, “home”, “spare time”, and “life” was measured in the rating scale.

The results were as follow.

1. The statistically significant correlation was detected in each of 29 cases of 31 cases between the strength of the consciousness of “Ikigai” in “job” and that in “home”.

It was detected in each of 12 cases of 31 cases between the strength of the “Ikigai” consciousness in “job” and that in “spare time”, and in each of 18 cases of 31 cases between “home” and “spare time”.

Therefore, it was concluded that the correlation of the “Ikigai” consciousness between “job” and “home” was most frequent.

2. The statistically significant correlation (partial correlation) was detected in each of all 31 cases between “job” and “life”, in each of 29 cases of 31 cases between “home” and “life”, and in each of 21 cases of 31 cases between “spare time,, and “life”.

So, it was concluded that the correlation of the “Ikigai” consciousness between “job” and “life” was most frequent.

序

目 的

本研究の目的は、企業従業員の「生きがい」意識の構造を彼の個人的属性との関連において検討することである。

従業員の「生きがい」の意義

1960年代中頃より今日に至るまで、日本の社会におい

て「生きがい」論が流行していることはよく知られている。その社会的背景が、日本の社会における「神」不在にあり、その時代的背景が、1960年代中頃からの「高度経済成長」による「生活」からの解放にあることは確かである。

企業の従業員といえども彼が従業員である以前に1人の社会人として存在する限り、この「生きがい」論流行の現代的状況の影響を受けざるをえない。産業心理学、

* 名古屋工業大学 生産システム工学科

** 名古屋工業大学 生産システム工学科

Department of Systems Engineering, Nagoya Institute of Technology

労務管理の立場より企業従業員を研究、管理の対象とするとき、「労働意欲」、個人の「福祉」という観点より彼の「生きがい」がそれぞれの立場において重要な課題となる。この意味で企業従業員の「生きがい」はテーマになると考える。

「生きがい」の対象

見田(1970)は、現代日本人の「生きがい」について論じ、「生きがい」を「仕事」の「生きがい」、「家庭」の「生きがい」、「余暇」の「生きがい」に分け、それぞれの構造について述べている。

企業従業員の場合、彼の行動(生活)空間は、「職場」、「家庭」、「それ以外の場所」の3つに大別される。そして、それぞれの場における彼の行動が志向される対象は「仕事」、「家庭」(家族との交流を含んだ家庭生活の対象としての「家庭」)、「余暇」(「余暇活動」)である。それゆえ、企業従業員の「生きがい」対象を彼の生活空間という次元より大別すれば、「仕事」、「家庭」、「余暇」の3つに分類される。そして、それぞれの対象に対して彼が抱く「生きがい」意識(どの程度「それ」に「生きがい」を感じているかという意識)の総和として彼が彼自身の「人生」に対して抱く「生きがい」意識が決定されると考える。

「生きがい」意識の構造

企業従業員の「生きがい」をテーマにして、本研究は以下の2つのことを検討することを具体的な目的とした。

すなわち、企業従業員の「生きがい」意識における

①「仕事」の「生きがい」、「家庭」の「生きがい」、「余暇」の「生きがい」の3つの「生きがい」の相互関係

②「仕事」、「家庭」、「余暇」のそれぞれの「生きがい」と「人生」の「生きがい」との相互関係

仮説

見田(1970)は、「仕事」、「家庭」、「余暇」の「生きがい」についてその構造を分析している。それによると「仕事」の「生きがい」の本質は、「仕事」を通しての「自己実現」、「交流」の2つの要因に在るとし、これらの要因において個人がどの程度その欲求が充足されるかによって「仕事」の「生きがい」意識の強さが規定されると述べている。さらに、これら2つの要因は別個には存在しえず、個人の意識の有無に関係なく一方の存在のためには他方の存在を前提しなければならず、したがって、両者は「相互媒介的構造」としてしか、いわゆる「仕事」においては、存在しえないとしている。それゆえ、「仕事」の「生きがい」は、「自己実現」と「交流」との「相互媒介的構造」に在る。

「家庭」の「生きがい」の本質も、「仕事」の「生きが

い」の「それ」と同じであり、「家庭」の「生きがい」も「相互媒介的構造」に在ると述べている。そして、「余暇」の「生きがい」の場合にも、前述の2つの要因が含まれてはいるが、それら2つの要因が「余暇」においては同時に存在せず別個に相互に関連なく存在していると主張している。したがって、「余暇」の「生きがい」の構造は、「仕事」、「家庭」の「生きがい」の「それ」とは異なる。

また、田中(1972)は、相関係数を用いて分析した資料によって「仕事」の「生きがい」と「家庭」の「生きがい」とは相関するが、「余暇」の「生きがい」は他の2つの「それ」のいずれとも相関しないことを示している。

以上のことから、前述の本研究の目的①に対して、以下の「仮説1」が成立する。

仮説1:「仕事」、「家庭」、「余暇」のそれぞれの「生きがい」の間では、「仕事」の「生きがい」と「家庭」の「それ」との間で相関がみられ、「余暇」の「それ」は他の2つの「それ」のいずれとも相関がみられない。

「生きがい」を一般的に、あるいは、「人生」の「生きがい」という次元で本質的、根底的に論じるならば、広い意味での個人の「生きざま」そのものにおける「自己実現」とそれによる「交流」の2つの要因がその本質であり、この2つの要因は「相互媒介的構造」としてしか存在しえないと考えられる。また、「仕事」が「公的場面」を、「家庭」が「私的場面」を意味するとき、「自己実現」の「普遍的価値」への方向、「交流」の「全人類」との「交流」への方向への制約に関して差異が考えられる。個別的、具体的条件を捨象して一般的に考えるならば、「仕事」における方が制約がない。

以上のことから、前述の本研究の目的②に対して、以下の「仮説2」が成立する。

仮説2:「仕事」、「家庭」、「余暇」のそれぞれの「生きがい」と「人生」の「生きがい」との相互関係においては、「仕事」、「家庭」、「余暇」の順にその関連の度合が低下する。

以上の2つの仮説を従業員の個人的属性との関連において検討する。

方 法

1) 対象者

調査対象者は、下記の6つの企業の従業員であり、合計1822名(男子1221名、女子601名)の従業員から資料を得た。

K社:愛知県豊田市に本社があり、「自動車部品」を製造している企業である。調査は1978年に行なわれた

が、当時の従業員数は約900名であった。577名（男子342名、女子235名）の従業員から資料を得た。

A社：愛知県名古屋市に本社があり、「通信機器」を製造している企業である。調査は1979年に行なわれたが、当時の従業員数は約400名であった。378名（男子294名、女子84名）の従業員から資料を得た。

S社：岐阜県岐阜市に本社があり、「電気機器」を製造している企業である。調査は1982年に行なわれたが、当時の従業員数は約450名であった。384名（男子297名、女子87名）の従業員から資料を得た。

N社：愛知県名古屋市に本社があり、「コンタクトレンズ」を製造している企業である。調査は1983年に行なわれたが、当時の従業員数は約400名であった。353名（男子210名、女子143名）の従業員から資料を得た。

H社：愛知県名古屋市に本社があり、「紙製品」卸問屋である。調査は1983年に行なわれたが、当時の従業員数は約100名であった。70名（男子44名、女子26名）の従業員から資料を得た。

T社：愛知県西春日井郡に本社があり、「襪紙」を製造している企業である。調査は1984年に行なわれたが、当時の従業員数は約70名であった。60名（男子34名、女子26名）の従業員から資料を得た。

企業別と6つの企業を合計したものと両方について結果を整理したが、本論文では、6つの企業の従業員を合わせた場合の結果についてのみ「結果」の項で報告する。

2) 調査票

以下の内容をもった「調査票」によって調査を実施した。

「以下のものに対してあなたはどの程度「生きがい」を感じますか。その程度にしたがって「評定」点をつけて下さい。」という質問内容で、10点満点の10段階評定（「1」：「全然「生きがい」を感じない。」；「10」：「非常に「生きがい」を感じる。」）で、「仕事」、「家庭」、「余暇」の「生きがい」の3つの対象に「人生」を付加した4つの対象の各々に対して「評定」させた。

3) 個人的属性

調査票の表紙に以下の6つの属性の各々についてその「水準」（「段階」）を記入させ、分析のときの要因を得た。

①「性」この属性では2水準を設定した。

1. 男子；2. 女子

②「年齢」この属性では9水準を設定した。

1. 20歳未満（以後「20未」と略記する。）；2. 20歳以上・25歳未満（以後「20・25」と略記する。）；3. 25

歳以上・30歳未満（「25・30」）；4. 30歳以上・35歳未満（「30・35」）；5. 35歳以上・40歳未満（「35・40」）；6. 40歳以上・45歳未満（「40・45」）；7. 45歳以上・50歳未満（「45・50」）；8. 50歳以上・55歳未満（「50・55」）；9. 55歳以上（以後「55上」と略記する。）

③「勤続年数」この属性では7水準を設定した。

1. 3年未満（以後「3未」と略記する。）；2. 3年以上・5年未満（以後「3・5」と略記する。）；3. 5年以上・10年未満（「5・10」）；4. 10年以上・15年未満（「10・15」）；5. 15年以上・20年未満（「15・20」）；6. 20年以上・25年未満（「20・25」）；7. 25年以上・30年未満（「25・30」）

④「学歴」この属性では4水準を設定した。

1. 中学校卒（以後「中学」と略記する。）；2. 高等学校卒（「高校」）；3. 短期大学卒（「短大」）；4. 大学卒、大学院卒（「大学」）

⑤「地位」この属性では5水準を設定した。

1. パートタイマー（以後「パート」と略記する。）；2. 一般（「一般」）；3. 係長クラス（「係長」）；4. 課長クラス（「課長」）；5. 部長クラス以上（「部長」）

⑥「職種」この属性では4水準を設定した。

1. 技術職（以後「技術」と略記する。）；2. 事務職（「事務」）；3. 営業職（「営業」）；4. 技能職（「技能」）
調査は留置法によって実施した。調査票を配布してから回収までの期間は約2週間であった。

結 果

回収された調査票のうち有効回答数を従業員の個人的属性ごとに表示すると表1のようになった。表1に示されたように「勤続年数」が「30年以上」は3名しかいなかったもので以後の分析においては省くことにした。それで「勤続年数」については7水準となった。

1. 「生きがい」意識の相互関係について

「生きがい」の対象としての「仕事」（以後「仕」と略記する。）、「家庭」（以後「家」と略記する。）、「余暇」（以後「余」と略記する。）と「人生」（以後「人」と略記する。）を付加した4つの対象のそれぞれに対する「生きがい」意識の強さ（10点満点、10段階評定）を調査した。「生きがい」意識の強さについて対象間での相互関係を検討するために相関係数（単純相関係数）を求め、それを表示すると表2、3、4、5、6、7に示されるようなものとなった。

これらの表より「仕」、「家」、「余」の3つの対象間での「生きがい」意識の相互関係について従業員の「個人的属性」別に以下に検討する。

表 1 属性別有効回答数

属性	水準	回数	属性	水準	回数
性	男子	1208	年 数	20・25	71
	女子	583		25・30	21
				30上	3
年	20未	81	学 歴	中 学	471
	20・25	300		高 校	664
	25・30	388		短 大	145
	30・35	370		大 学	1794
齢	35・40	217	地 位	パート	46
	40・45	169		一 般	1211
	45・50	136		係 長	249
	50・55	75		課 長	104
勤 続	55上	53	職 種	部 長	74
	3未	290		技 術	256
	3・5	352		事 務	346
	5・10	524		営 業	393
	10・15	405	技 能	712	
	15・20	113			

表 2 「性」別相関係数

性	対象		仕 事	家 庭	余 暇
	対象	対象			
男 子	仕 事	—	—	—	—
	家 庭	0.349**	—	—	—
	余 暇	-0.009	0.050	—	—
女 子	人 生	0.461**	0.386**	0.172*	—
	仕 事	—	—	—	—
	家 庭	0.424**	—	—	—
女 子	余 暇	0.157*	0.148*	—	—
	人 生	0.448**	0.542**	0.314**	—

* : p < 0.05 ; ** : p < 0.01

①「性」別の場合、表 2 より以下のことが分かる。

「男子」においては、「仕」と「家」の間にのみ相関が認められる。

「女子」においては、3つの相互関係のすべてにおいて相関が認められる。

以上のことより以下のことがいえる。

1. いずれの「性」においても、「仕」と「家」の間に

表 3 「年齢」別相関係数

年齢	対象		仕 事	家 庭	余 暇
	対象	対象			
20 未	仕 事	—	—	—	—
	家 庭	0.192	—	—	—
	余 暇	0.138	-0.188	—	—
20 ・ 25	人 生	0.427**	0.139	0.100	—
	仕 事	—	—	—	—
	家 庭	0.292**	—	—	—
25 ・ 30	余 暇	0.149*	0.056	—	—
	人 生	0.303**	0.376**	0.231**	—
	仕 事	—	—	—	—
25 ・ 30	家 庭	0.229**	—	—	—
	余 暇	0.073	0.166**	—	—
	人 生	0.430**	0.422**	0.237**	—
30 ・ 35	仕 事	—	—	—	—
	家 庭	0.239**	—	—	—
	余 暇	0.125*	0.108*	—	—
35 ・ 40	人 生	0.477**	0.413**	0.162**	—
	仕 事	—	—	—	—
	家 庭	0.301**	—	—	—
35 ・ 40	余 暇	0.171*	0.281**	—	—
	人 生	0.445**	0.389**	0.340**	—
	仕 事	—	—	—	—
40 ・ 45	家 庭	0.256**	—	—	—
	余 暇	0.195*	0.251**	—	—
	人 生	0.403**	0.542**	0.290**	—
45 ・ 50	仕 事	—	—	—	—
	家 庭	0.472**	—	—	—
	余 暇	0.337**	0.426**	—	—
50 ・ 55	人 生	0.524**	0.567**	0.454**	—
	仕 事	—	—	—	—
	家 庭	0.482**	—	—	—
50 ・ 55	余 暇	0.208	0.302*	—	—
	人 生	0.496**	0.515**	0.283*	—
	仕 事	—	—	—	—
55 上	家 庭	0.644**	—	—	—
	余 暇	0.155	0.136	—	—
	人 生	0.729**	0.753**	0.247	—

相関係数が認められる。

2. 「女子」の方が、「生きがい」意識間の関連が強い。

②「年齢」別の場合、表 3 より以下のことが分かる。

「20未」(20歳未満)においては、3つの相互関係のい

表 4 「勤続年数」別相関係数

勤	対象		仕 事	家 庭	余 暇
	対象				
3 未	仕 事	—	—	—	—
	家 庭	0.293**	—	—	—
	余 暇	0.139*	0.029	—	—
3 ・ 5	人 生	0.362**	0.459**	0.269**	—
	仕 事	—	—	—	—
	家 庭	0.032	—	—	—
5 ・ 10	余 暇	-0.006	0.000	—	—
	人 生	0.444**	0.380**	0.193**	—
	仕 事	—	—	—	—
5 ・ 10	家 庭	0.305**	—	—	—
	余 暇	0.038	0.124**	—	—
	人 生	0.404**	0.411**	0.226**	—
10 ・ 15	仕 事	—	—	—	—
	家 庭	0.403**	—	—	—
	余 暇	0.202**	0.198**	—	—
10 ・ 15	人 生	0.581**	0.534**	0.236**	—
	仕 事	—	—	—	—
	家 庭	0.253**	—	—	—
15 ・ 20	余 暇	0.176*	0.464**	—	—
	人 生	0.447**	0.390**	0.278**	—
	仕 事	—	—	—	—
20 ・ 25	家 庭	0.317**	—	—	—
	余 暇	-0.088	0.125	—	—
	人 生	0.592**	0.440**	0.107	—
25 ・ 30	仕 事	—	—	—	—
	家 庭	0.640**	—	—	—
	余 暇	0.291	0.520*	—	—
25 ・ 30	人 生	0.715**	0.782**	0.466*	—

ずれにおいても相関が認められない。

「55上」(55歳以上)においては、「仕」と「家」の間のみ相関が認められる。

「20・25」(20歳以上・25歳未満)においては、「仕」と「家」、「仕」と「余」の間に相関が認められる。

「20・30」、「50・55」の2つの群においては、いずれの群においても「仕」と「家」、「家」と「余」の間に相関が認められる。

9つの群の内上述の5群を除いた残りの4群、すなわち、「30・35」、「35・40」、「40・45」、「45・50」の4群においては、いずれの群においても3つの相互関係のすべてにおいて相関が認められる。

以上のことより以下のことがいえる。

表 5 「学歴」別相関係数

学歴	対象		仕 事	家 庭	余 暇
	対象				
中 学	仕 事	—	—	—	—
	家 庭	0.451**	—	—	—
	余 暇	0.166**	0.170**	—	—
高 校	人 生	0.517**	0.553**	0.284**	—
	仕 事	—	—	—	—
	家 庭	0.292**	—	—	—
短 大	余 暇	0.029	0.063	—	—
	人 生	0.447**	0.401**	0.220**	—
	仕 事	—	—	—	—
大 学	家 庭	0.297**	—	—	—
	余 暇	-0.101	-0.022	—	—
	人 生	0.262**	0.395**	0.258**	—
大 学	仕 事	—	—	—	—
	家 庭	0.387**	—	—	—
	余 暇	-0.017	0.102*	—	—
大 学	人 生	0.415**	0.451**	0.126**	—

表 6 「地位」別相関係数

地位	対象		仕 事	家 庭	余 暇
	対象				
パ ー ト	仕 事	—	—	—	—
	家 庭	0.312*	—	—	—
	余 暇	0.140	0.322*	—	—
一 般	人 生	0.552**	0.717**	0.531**	—
	仕 事	—	—	—	—
	家 庭	0.348**	—	—	—
課 長	余 暇	0.052	0.029	—	—
	人 生	0.421**	0.430**	0.217**	—
	仕 事	—	—	—	—
係 長	家 庭	0.310**	—	—	—
	余 暇	0.099	0.190**	—	—
	人 生	0.539**	0.316**	0.122*	—
課 長	仕 事	—	—	—	—
	家 庭	0.393**	—	—	—
	余 暇	0.304**	0.306**	—	—
部 長	人 生	0.632**	0.390**	0.294**	—
	仕 事	—	—	—	—
	家 庭	0.286*	—	—	—
部 長	余 暇	0.084	0.437**	—	—
	人 生	0.536**	0.492**	0.381**	—

表 7 「職種」別相関係数

職	対象		仕 事	家 庭	余 暇
	対 象	対 象			
技 術	仕 事	—	—	—	—
	家 庭	0.296**	—	—	—
	余 暇	0.010	0.078	—	—
	人 生	0.368**	0.409**	0.223**	—
事 務	仕 事	—	—	—	—
	家 庭	0.302**	—	—	—
	余 暇	-0.088	0.087	—	—
	人 生	0.291**	0.426**	0.256**	—
営 業	仕 事	—	—	—	—
	家 庭	0.454**	—	—	—
	余 暇	0.113*	0.094	—	—
	人 生	0.463**	0.371**	0.220**	—
技 能	仕 事	—	—	—	—
	家 庭	0.375**	—	—	—
	余 暇	0.088	0.098*	—	—
	人 生	0.497**	0.512**	0.202**	—

1. 9つの群の内、「20未」を除く残りの8つの群のすべてにおいて、「仕」と「家」の間の相関係数が認められる。

2. 「仕」と「余」の間の相関係数は、「20・25」, 「30・35」, 「35・40」, 「40・45」, 「45・50」の5つの群において認められた。

3. 「家」と「余」の間の相関係数は、「25・30」, 「50・55」, 「30・35」, 「35・40」, 「40・45」, 「45・50」の6つの群において認められた。

4. 30歳から50歳未満といういわゆる中年層の4つの群においては、3つの相互関係のすべてにおいて相関係数が認められた。この意味で中年層は「生きがい」意識間の関連が強い。

③「勤続年数」別の場合、表4より以下のことが分かる。

「3・5」（3年以上・5年未満）の群においては、3つ相互関係のいずれにおいても相関が認められない。

「20・25」（20年以上・25年未満）においては、「仕」と「家」の間のみ相関が認められる。

「3未」（3年未満）においては、「仕」と「家」, 「仕」と「余」の間に相関が認められる。

「5・10」, 「25・30」の2つの群においては、いずれの群においても、「仕」と「家」, 「家」と「余」の間に相関が認められる。

「10・15」, 「15・20」の2つの群においては、いずれの群においても、3つの相互関係のすべてにおいて相関が

みられる。

以上のことより以下のことがいえる。

1. 7つの群の内、「3・5」を除く残りの6つの群のすべてにおいて、「仕」と「家」の間の相関係数が認められる。

2. 「仕」と「余」の間の相関係数は、「3未」, 「10・15」, 「15・20」の3つの群において認められた。

3. 「家」と「余」の間の相関係数は、「5・10」, 「10・15」, 「15・20」, 「25・30」の4つの群において認められた。

4. 10年以上から20年未満といういわゆる中堅層の2つの群においては、3つの相互関係のすべてにおいて相関係数が認められた。この意味で中堅層は「生きがい」意識間の関連が強い。

④「学歴」別の場合、表5より以下のことが分かる。

「中」（中学校卒）においては、3つの相互関係のすべてにおいて相関がみられる。

「高」（高等学校卒）, 「短」（短期大学卒）の2つの群においては、いずれの群においても、「仕」と「家」の間のみ相関が認められる。

「大」（大学卒以上）においては、「仕」と「家」, 「家」と「余」の間に相関が認められる。

以上のことより以下のことがいえる。

1. 4つの群のすべてにおいて、「仕」と「家」の間の相関係数が認められる。

2. 「中」においては、「生きがい」意識間の関連が強い。

⑤「地位」別の場合、表6より以下のことが分かる。

「一般」においては、「仕」と「家」の間のみ相関が認められる。

「パート」, 「係長」, 「部長」（部長クラス以上）の3つの群においては、いずれの群においても、「仕」と「家」, 「家」と「余」の間に相関が認められる。

「課長」においては、3つの相互関係のすべてにおいて相関が認められる。

以上のことより以下のことがいえる。

1. 5つの群のすべてにおいて、「仕」と「家」の間の相関係数が認められた。

2. 「仕」と「余」との相関係数は、「課長」においてのみ認められた。

3. 「家」と「余」との相関係数は、「一般」を除く残りの4つの群のすべてにおいて認められた。

⑥「職種」別の場合、表7より以下のことが分かる。

「技術」, 「事務」, 「技能」の3つの群においては、いずれの群においても「仕」と「家」の間のみ相関が認め

られる。

「営業」においては、「仕」と「家」、「仕」と「余」の間に相関が認められる。

以上のことより以下のことがいえる。

1. 4つの群のすべてにおいて「仕」と「家」の間の相関関係が認められた。

2. 「営業」においては、「仕」と「余」の間にも相関関係が認められた。

以上のことから以下の結論を導出することができる。

本研究においては、「性」、「年齢」、「勤続年数」、「学歴」、「地位」、「職種」という6つの個人的属性が抽出され、各属性について2つから9つまでの水準が設定された。その結果、全体で31の群が設定された。そして、「生きがい」意識間の相関関係について

1. 「仕」と「家」との相関関係は、29の群においてみられた。

2. 「仕」と「余」との相関関係は、12の群においてみられた。

3. 「家」と「余」との相関関係は、18の群においてみられた。

という結果を得た。このことから、相関関係が認められた回数という意味で、

1. 「仕」に対する「生きがい」意識と「家」に対する「生きがい」意識とが最も強く相関する。

2. 「余」に対する「生きがい」意識は、本研究の場合のように個人的属性における水準別に検討するとき、「仕」、「家」のそれぞれの「生きがい」意識とある程度相関するといえる。

以上のことから、仮説1は相関の相対的頻度を考慮すれば支持されたといえる。

2. 「人生」に対する「生きがい」意識との関係について

「仕」、「家」、「余」の3つの対象のそれぞれに対する「生きがい」意識の強さと「人生」に対する「生きがい」意識の強さ(10点満点, 10段階評定)との相関関係を検討するために、各対象に対する「生きがい」意識の強さと「人生」に対する「それ」との間で偏相関係数を求めた。それを表示すると表8に示されるようなものであった。

これらの表より相互関係について「属性」別に以下に検討する。

①「性」別の場合、表8より以下のことが分かる。

「男子」、「女子」いずれにおいても、各対象に対する「生きがい」がいずれも人生に対する「生きがい」と相関することが認められる。

表8 「人生」との偏相関係数

属性		対象		
		仕事	家庭	余暇
性	男子	0.388**	0.265**	0.190**
	女子	0.270**	0.428**	0.263**
年 齢	20 未	0.398**	0.076	0.062
	20・25	0.224**	0.312**	0.233**
	25・30	0.378**	0.346**	0.187*
	30・35	0.420**	0.344**	0.095
	35・40	0.362**	0.244**	0.244**
	40・45	0.308**	0.470**	0.154*
	45・50	0.322**	0.354**	0.244*
勤 続 年 数	50・55	0.322**	0.330**	0.139
	55 上	0.478**	0.544**	0.205
	3 未	0.241**	0.411**	0.263**
	3・5	0.378**	0.286**	0.226**
	5・10	0.327**	0.314**	0.204**
	10・15	0.461**	0.391**	0.107*
学 歴	15・20	0.387**	0.252*	0.101
	20・25	0.546**	0.308**	0.155
	25・30	0.458*	0.522*	0.157
	中 学	0.347**	0.407**	0.210**
地 位	高 校	0.384**	0.312**	0.226**
	短 大	0.204*	0.358**	0.313**
	大 学	0.300**	0.335**	0.114*
職 種	パ ー ト	0.535**	0.658**	0.498**
	一 般	0.339**	0.225**	0.487**
	係 長	0.487**	0.176*	0.053
	課 長	0.547**	0.175	0.101
職 種	部 長	0.496**	0.298*	0.267**
	技 術	0.292**	0.331**	0.226**
	事 務	0.226**	0.353**	0.273**
職 種	営 業	0.348**	0.199**	0.185**
	技 能	0.380**	0.400**	0.169**

②「年齢」別の場合、表8より以下のことが分かる。

「20未」においては、「仕」の「生きがい」のみが「人生」の「生きがい」と相関することが分かる。

「30・35」、「50・55」、「55上」の3つの群においては、いずれの群においても「仕」の「生きがい」、「家」の「生きがい」の2つが、それぞれ「人生」の「生きがい」と相関することが分かる。

残りの5つの群、すなわち、「20・25」、「25・30」、「35・40」、「40・45」、「45・50」の5つの群のいずれにおいても、「仕」、「家」、「余」のそれぞれに対する「生きがい」

い」がすべて「人生」に対する「生きがい」と関連することが分かる。

以上のことより以下のことがいえる。

1. 9つの群のすべてにおいて、「仕」の「生きがい」と「人生」に対する「生きがい」との間に相関関係が認められた。

2. 9つの群の内、「20末」を除く、残りの8つの群のいずれにおいても「家」の「生きがい」と「人生」に対する「生きがい」との間に相関関係が認められた。

3. 9つの群の内、5つの群においては、「余」の「生きがい」と「人生」に対する「生きがい」との間に相関関係が認められた。

③「勤続年数」別の場合、表8より以下のことが分かる。

「15・20」、「20・25」、「25・30」の3つの群のいずれにおいても、「仕」の「生きがい」、「家」の「それ」の2つが、それぞれ「人生」の「生きがい」と関連することが分かる。

残りの4つの群、すなわち、「3末」、「3・5」、「5・10」、「10・15」の4つの群のいずれにおいても、「仕」、「家」、「余」のそれぞれに対する「生きがい」がすべて「人生」に対する「生きがい」と関連することが分かる。

以上のことより以下のことがいえる。

1. 7つの群のすべてにおいて、「仕」の「生きがい」と「人生」に対する「生きがい」との間に相関関係が認められた。

2. 7つの群のすべてにおいて、「家」の「生きがい」と「人生」に対する「生きがい」との間に相関関係が認められた。

3. 7つの群の内、4つの群においては、「余」の「生きがい」と「人生」に対する「生きがい」との間に相関関係が認められた。

④「学歴」別の場合、表8より以下のことが分かる。

すべての群において、「仕」、「家」、「余」のそれぞれに対する「生きがい」がすべて「人生」の「生きがい」と関連することが分かる。

⑤「地位」別の場合、表8より以下のことが分かる。

「課長」においては、「仕」の「生きがい」のみが「人生」の「生きがい」と関連することが分かる。

「係長」、「部長」の2つの群においては、いずれの群においても「仕」の「生きがい」、「家」の「生きがい」の2つが、それぞれ「人生」の「生きがい」と関連することが分かる。

「パート」、「一般」の2つの群においては、いずれの群においても、「仕」、「家」、「余」のそれぞれに対する「生きがい」がすべて「人生」に対する「生きがい」と相関

することが分かる。

以上のことより以下のことがいえる。

1. 5つの群のすべてにおいて、「仕」の「生きがい」と「人生」に対する「生きがい」との間に相関関係が認められた。

2. 「課長」を除く残り4つの群のすべてにおいて、「家」の「生きがい」と「人生」に対する「生きがい」との間に相関関係が認められた。

3. 2つの群においては、「余」の「生きがい」と「人生」に対する「生きがい」との間に相関関係が認められた。

⑥「職種」別の場合、表8より以下のことが分かる。

4つのすべての職種において、「仕」、「家」、「余」のそれぞれに対する「生きがい」がすべて「人生」に対する「生きがい」と関連することが分かる。

以上のことから以下の結論を導出することができる。

1. 「仕」の「生きがい」と「人生」に対する「生きがい」との相関関係は、31群のすべてにおいてみられた。

2. 「家」の「生きがい」と「人生」に対する「生きがい」との相関関係は、29群においてみられた。

3. 「余」の「生きがい」と「人生」に対する「生きがい」との相関関係は、21群においてみられた。

このことから、相関関係が認められた回数という意味で、

1. 「仕」に対する「生きがい」意識と「人生」に対する「生きがい」意識とが最も強相関し、次に「家」に対する「それ」が相関し、「余」に対する「それ」との相関は最も弱い。

2. しかし、序において予想されたことと異なって、「家」に対する「生きがい」意識が、「仕」に対する「それ」と同じ程度に、「人生」に対する「生きがい」意識と相関をもつ、また、「余」に対する「生きがい」意識が、かなり「人生」に対する「それ」に相関をもつことが指摘できる。

以上のことから、仮説2は一応支持されたといえる。

考 察

「余暇」の「生きがい」について

前述の結果において、「余暇」の「生きがい」と「人生」の「生きがい」との間の相関関係が31群中の21群において認められた。見田(1970)の主張する「生きがい」の構造からすると「余暇」の「生きがい」は「人生」の「生きがい」になりにくいはずである。しかるに前述のような結果になった。このことは一考に値する。「余暇」活動がいわゆる「ひまつぶし」、「レジャー」、「リクリエーション」的な、換言すれば、「遊び」的な活動を

意味する限り、それは「生きがい」の本質からいって、「生きがい」にはなりえない。しかし、見田(1970)の意味する「余暇」とはこのような「遊び」的なものである。しかし、本研究の場合は、「仕事」、「家庭」活動以外のすべてのものを「余暇」活動という枠で捉えている。それゆえ、「余暇」活動の中には上述のいわゆる「遊び」的なものではないものも含まれている。個人によっては、「余暇」活動の中で本人にとっては真の「仕事」(例えば、「芸ごと」などの内面的向上につながる諸々の活動)に従事している場合がある。余業従業員においては、最近とくにこの傾向が強いと聞く。とすれば、「余暇」というカテゴリーではあってもそれは本人にとっては「仕事」(「使命」)であり、当然「人生」の「生きがい」になりうる。このように考えれば本研究の結果は理解できる。

今後の課題

「生きがい」方程式について

紙数の関係もあって本論では省いたが、実は著者達は「仮説3」を設定し、その検証を行なっている。「仮説3」とは、以下のようなものである。

仮説3 : 「人生」の「生きがい」は、「仕事」、「家庭」、「余暇」のそれぞれの「生きがい」の総和として考えられるので、この関係を定量的に表現できる。

この結果については別報にて報告したい。

「生きがい」意識の強さについて

さらに、各対象に対する「生きがい」意識の強さを「評定点」で測定したので、この「評定点」についての分析結果も後日報告したい。

文 献

- 1) 見田宗介：現代の生きがい，日本経済新聞社，1970.
- 2) 田中博秀：サラリーマンの生きがい，毎日新聞社，1972.